

知られざる保険会社 (1)仁壽生命

10月の後半に二つの学会に出席した。ひとつは福井市、もうひとつは彦根市での開催。ともに台風にたたられて、ようやくのことで帰宅することが出来た。福井の学会は、午後の部を繰り上げて、午前の部と並行して行い、会員は昼過ぎに帰路についたが、小松空港などを利用した方などは欠航した便があり大変だったようである。彦根で開催されたのは、日本保険学会であったが、懇親会場で、この連載を読んでもらっているという何人かの方にお目にかかり、嬉しく思うとともに、今後も手を抜かずにオリジナルな連載を続けていく決意をあらたにした。皆様、今後ともご愛読をよろしくお願い申し上げます。

これまで連載において「保険会社と建築の関係」などいくつかのまとまったテーマを取り扱ってきたが、今回から「知られざる保険会社」と題して、戦前の保険の歴史の中でそれなりの存在感や歴史的意義をもった会社を折にふれて紹介したい。現在存続している会社は、すでに社史等があってその歴史を調べることは簡単だが、合併などによって消滅した会社については、その歴史を詳しく調べることは容易ではない。ところで最近の若者は、知らないことがあると Google で検索し、ウィキペディアなどを利用する。今回とりあげた仁壽生命はウィキペディアの項目となっているが、そこにはほとんど詳しい情報が掲載されていない。所蔵する保険関係史料により、知られざる保険会社の歴史を紹介し、記録として残しておくことは、それなりに意味のあることではないかと思っている。

仁壽生命は、明治 27 年に合資会社として設立された会社で、戦前において長く保険営業を行ってきた中堅生保である。明治 27 年は、明治、帝国、日本という先行する三大生保に追随して生命保険会社が数多く新設された年であり、同社もその一つであった。同社の設立事情は次のとおりである。明治 26 年 12 月に「調査仮事務所を西邑虎四郎控邸に置き、東條一郎、藤木久三郎そのた三名」で設立準備を行い、翌年 6 月 30 日に第一回発起人総会を開催し、辻新次、東條一郎、藤木久三郎を創立委員として、資本金 10 万円の合資会社を設立することを決めた。出資者はそれぞれ 1 万円で、伯爵松平直亮、子爵戸田康泰、辻新次、東條一郎、藤木久三郎、今村繁三、西村定次郎、西村吉次郎、三野村利市および宮原篤の 10 名であった（『第 1 回営業報告書』明治 27 年）。

初代社長に就任した辻新次は、明治初期の文部官僚として有名な人物であるが、明治 25 年に文部省退官後、伊藤博文が創設した東京女学館の初代館長に就任していたが、小学校教員の遺族救済という目的のために仁壽生命の設立に参加した。伯爵松平直亮（まつだいら・なおおき）は、松江藩松平家の当主。子爵戸田康泰（とだ・やすひろ）は松本藩最後の藩主松平光則の長男で、外交官を経て、明治 20 年に帰国していた。明治 22 年に三条実美らと北海道で家族組合農場を経営したが成功に至らず、4 年余りで解散している。辻新次が旧松本藩士であることから、辻が勧誘したものと思われる。東條一郎は、1848 年に会津若松で生れた会津藩士であるが、維新後文部官僚となった後、明治 24 年に官を辞して仁壽生命設立では上司の辻を補佐した。これらのことから、辻新次は単なる名誉職として参加

## 保険毎日新聞「みちくさ保険物語」049

したのではなかったようだ。1万円ずつ均等出資の10名の出資社員からなる合資会社という企業形態に、創業者達の意図が示されているように思われる。〔合資会社の当時の保険案内の画像掲載〕

同社は、明治32年2月、東京市麹町区内幸町1丁目3番地に所在の建物を購入し、同年5月15日をもって移転した。会計記録によれば、「煉瓦並に木造建物及煉瓦倉庫とも総計123坪」とある。〔『第5回営業報告書』明治33年〕掲載した絵葉書の建物が、この時に購入した社屋であるかどうか確定できない。というのは、その後の不動産明細書をチェックしていくと徐々に土地を増やしていき、大正9年から大正10年にかけて同一住所ながら174坪から272坪に急増させているからである。ただし営業報告書で見ると、新築に言及する記述はないので、土地の買収は、昭和4年の社屋建築のための準備と解釈できる。〔旧社屋掲載〕

初期の業績は掲載した新契約の推移からある程度推測できる。結論的にいえば、それほど目覚ましい進展をしているとはいえない。とくに1909年に辻が社長を辞任し、近江商人の有力者であった下郷傳平に経営権が異動する時期には新規契約が大きく落ち込んでいく。また下郷傳平の経営になったのちも、株式会社に組織転換（大正4年8月認可）をし、利益配当付き保険（大正5年9月認可）を発売する頃までは新規契約が停滞気味である（第21回および第22回『営業報告書』）。その後、関東大震災後に新規契約を著しく減少させてのちに急成長をとげるが、大正13年を頂点としてふたたび新規契約の減少に転じている。〔新契約の推移のグラフ〕

画像を掲載した新社屋は、昭和恐慌と新規契約の低下傾向の中で完成した。この社屋は、旧社屋のような歴史主義的な様式ではなく、近代洋式で仕上げられている。営業報告書によれば、「本社社屋新築落成に付昭和4年7月1日落成式を挙たり。昭和4年7月8日日本店及び東京支店は本社新築社屋へ移転し、翌9日移転登記手続きを了す」〔『第35回営業報告書』〕とある。また不動産明細書から新築社屋の概要を記せば、「東京市麹町区内幸町1丁目1番地 土地、営業用、599坪、361,335円。建物、営業用但し一部賃貸、鉄骨鉄筋混凝土造6階建、503坪、1,560,892円」〔『同上』〕とある。ちなみに不動産明細書によれば、同社が所有する木造以外の社屋は、大阪、仙台および京城の各支店があった。〔新社屋の画像、および大阪支店〕

今回は、文書史料ではなく、仁寿生命新社屋落成の記念品の文鎮を掲載した。ケースの寸法は、103mm四方で高さが20mmであり、文鎮の寸法は、直径73mmで重さが172gである。ケースの内部には、「新築記念、仁寿生命保険株式会社、昭和4年」とある。また文鎮には、新築本社の正面からの姿が彫られている。〔画像掲載〕

大正末期に下郷傳平が社長を弟の下郷寅太郎に譲っていたが、新社屋の落成後の昭和5年には、寅太郎が社長を辞任し、ふたたび下郷傳平が社長となった。下郷寅太郎が辞任した理由は明確ではないが、昭和金融恐慌による近江銀行の破綻が関係しているものと推測される。寅太郎は京都殖産株式会社の社長を兼任していたが、同社は破綻時の近江銀行の

最大株主であった。(伝田功「近江銀行設立前後—江州商人との関係について」『滋賀大学経済学部附属史料館研究紀要』1993年)。いずれにせよ、近江商人による近江銀行の拡大と成長に乗って、仁壽生命の経営に乗り込み、経営の進展につとめて下郷一族であったが、中核となる近江銀行を失って、仁壽生命の経営に大きな影を落としたことは否めない。

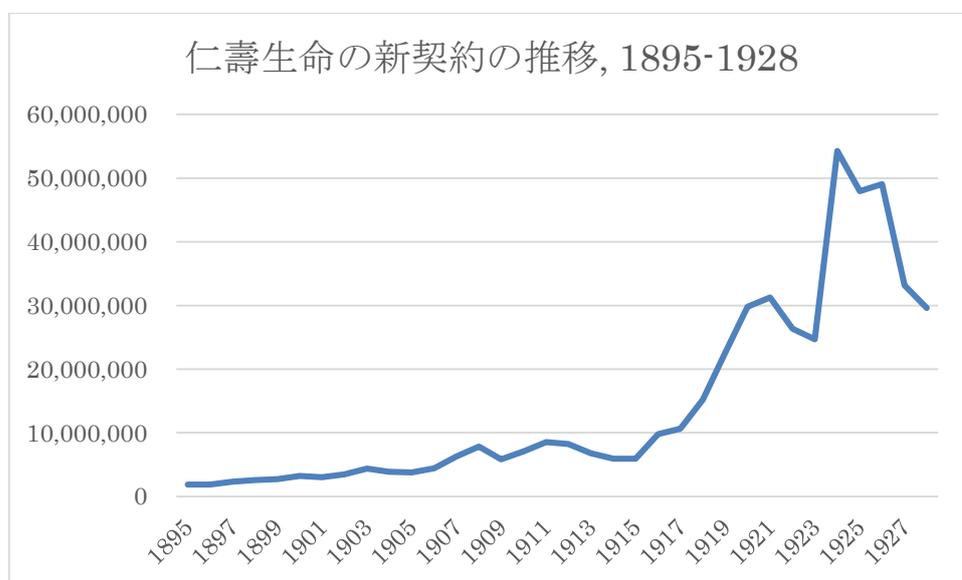
このような経営的な不安定さは別としても、昭和恐慌以降、五大生保と財閥系生保が伸長したのに対し、仁壽生命のような中堅生保はおしなべて伸び悩む傾向にあった。紙幅の関係でその後の展開について詳しく述べられないが、結末としては昭和16年10月に、同じような境遇に陥っていた中堅生保の日清生命とともに、野村生命に合併されることになり、50年近い寿命を終えることになった。



仁壽生命の合資会社時代の初期「保険案内」(明治32年2月以前)



震災直後の仁壽生命の本社



出典：仁壽生命『営業報告書』より計算。(縦軸：単位は円)



昭和4年に新築落成した仁壽生命本社屋



仁壽生命大阪支店（大阪市西区靱上通1丁目32番地）



仁壽生命本社新築落成記念文鎖（昭和4年）



仁壽生命本社新築落成記念文鎮の新社屋レリーフ（昭和4年）